

後期旧石器時代に於ける集落・集団研究の現状認識

岩 崎 泰 一

1 はじめに

当該集落や集団の研究は、個別石器の研究と並び立つ大きな柱である。研究の初期から、彼の時代の生活追究は研究者が等しく持つ願望だが、具体像は極めて不明瞭である。現状では住居の発見は難しく、特殊な場合を除いて木製品や骨格器の発見も殆ど期待できないのであり、石器から集落を語る以外にはないのである。この点に於いて、母岩分析を主な分析手段に据えた砂川的分析には極めて高い評価が下され、今日まで集落研究の主流を占めてきた。特に砂川遺跡の分析成果には、遥か遠い昔に消えた情報が分析を通じ思い浮かぶようでもあり、改めて砂川的分析の有効性を実感するのである。実際、他の時代の研究成果に比べて見ても、石器の製作状況、原石の消費、石器の搬入など、こと遺跡形成の過程やヒトの行動に関する分析は他の時代にも増して詳細に実態を描き出している。遺跡形成の過程や集落構造の分析に関する限り、現状では砂川的分析が最も効果的であり、今後とも当該遺跡分析の基本に位置づけられよう。一方、最近に見る二三の論考にはより広範な地域を対象に分析を行う地域分析や、石材構成からみた集団関係の分析を試みており、社会や集団の構造を捉えていくには砂川的分析だけでは難しい、と視点を変えた分析を求めている。そこには広い視野に立つ提言や分析の具体的提示も少なくなく、今後多様な分析が急速に展開していくようにも思えてくるのである。次の段階へ研究を進めるためにも、ここではこれまで蓄積してきた研究に多少なりとも検討を加え、砂川的分析の有効性と抱える問題点を捉えていきたい。

2 集落・集団研究の流れ

この時代の集落や集団研究は砂川的分析を基軸に展開してきた。分析は石器の接合作業や同一母岩の分類を基礎的作業に据えており、現在まで人間の行動を追究する上で極めて有効な分析と評価を受けてきたのである。ここでは、以下に研究の動向を振り返り、問題の所在を確認していきたい。

この種の研究が一定の評価を得て研究の俎上に登場するのは砂川遺跡の報告より前に遡る（稲田 1968）。敢えて紹介するまでなく、砂川遺跡では徹底した石器の接合作業と同一母岩の分類を軸に分析を行う、後に言う石器の製作構造と遺跡形成に関する重要な分析視点を示した。その後も砂川遺跡の分析は繰り返され、砂川の研究成果は今なお集落研究の確固たる位置を占めている。一方これとは別に、考古学研究会では集団や集団関係を議論していた。前者が発掘資料からみた人間行動の復元を目指したのに対し、後者は生のデータの理論的評価とも受け取れ、社会構造

を射程に入れた議論と言える。その後も砂川遺跡の分析は引き続いているため、まず考古学会の議論を簡単に整理しておきたい。

(1) 集団の性格に関する議論

近藤氏の考え方 (近藤 1976)

氏は、住居の接近群と等質な石器製作を内外の調査事例から読み取り、生産用具の製作と消費を行う一定の生産を遂行する単位を「単位集団」と捉え、さらには特定の範囲に居住し、相互に交流を維持する複数の単位集団を「集団群」と規定した。事実上、集団群を社会の構成単位と捉え、小集団が小地域に分散居住し、時に結集する居住形態を当時の社会構造と考えた。槍先を指向する石器製作の在り方から、日常の採集活動と本格的・組織的な狩猟を行う場合の居住形態の相違を指摘する一方で、分散居住と集住を繰り返す居住形態を集団の生存と維持を保証（危険分散）するもの、と述べている。

春成氏の考え方 (春成 1976)

氏は、自然環境を強く意識して集団関係・社会構造を論じている。その姿勢は文頭から窺われ、大形動物の絶滅や狩猟季節を取り上げていることでもよく分かる。氏は遺跡の大小や大形動物の移動距離から、大形動物の移動を契機に集団が離合集散する居住形態を想定した上で、民族成果を基に、婚姻形態や姻戚関係の拡大の他、当時の社会が内包した基本的矛盾にも言及している。近藤氏の言う集団の分散居住・集住と春成氏の言う離合集散は、時々々の事情に応じ居住形態の変化を予想する点では一致する反面、近藤氏が危険分散論に立脚するのに対し、春成氏は共同防衛論を採る点で大きく異なる。即ち、集団の集住を大形動物の移動時期に限定して想定するのではなく、植物性食糧の多い時期にも集住を想定し、条件つきだが集住を指向したとも述べている。更には、集団交流の役割を認め単位集団の流入も想定するなど、ある意味では柔軟な社会構造を想定している。また、氏は集団分析を踏まえ、集団相互の関係（集団領域の問題）にも論及しており、特に、黒曜石の在り方を中心に源初的交換と部族の存在が想定可能と、問題を提起した。集団の概念規定に関する記述は、論考の意図でもある時代の画期を予測する中で述べており、概ね民族的色彩の濃い規定と言える。即ち、最小の居住単位を単一世帯（一夫一妻と子供）の二三からなる「世帯」と呼び、集住した際を「合同世帯」と考えた。近藤・春成の両氏とも分散居住の際の個別労働と、集住の際の集団労働の間に矛盾を認め、この矛盾が集団の発展維持を齎した、と考えている。この時、既に氏は大形動物の集団狩猟がⅠ期まで遡る可能性を指摘している。氏の論じた問題は、今日、改めて浮上している問題でもあり、それだけ示唆する点も多い。

小野氏の考え方 (小野 1976)

集団関係を論じる環境にはない旨の指摘を承知した上で、集団関係を近藤・春成両氏の見解と対照させ、論じている。特に、石材採集の問題と、長野県野尻湖や岩戸出土の女性像が暗示する集団の性格を中心に論じている。氏の集団に関する見解は石器分布の空間部分を住居と想定し、数棟の住居が「世帯」を構成し、遺跡分布からみて台地単位に「氏族」を想定した。更に、世帯

と氏族の中間に複数の世帯からなる「世帯共同体」を設け、具体的に鈴木遺跡全体（A地点～D地点）を想定した。女性像＝母系制と考えるのは民族の見解の引用だが、見解に対する反論なり、意見は後の討議の中にも全く見られない。交易（石材）は想定されないこと、同一型式の広範な分布（部族の広がり）は石材を直接採集に出掛けた際の集団接触と考えた。批判には石材の豊富な地域と乏しい地域を上げ、石材の交換を前提に上位組織を想定する論法に立てば、地域単位に社会組織の凹凸を認めることにもなり、賛同できない旨の見解を示している。女性像や、その他の絵画、彫刻を呪術に深く関係する遺物と評価する一方、余剰労働の所産とも位置づけ、また、出現時期を問う中で、石材採集を日常労働から分け、特殊労働と考える背景には交易が成立してこそ日常労働に転換すること、当時の経済状況の下では交換する余剰が生まれないため、理論的に交易の成立する余地なし、と考えたのである。

研究初期の見解には微妙な差が生じており、いまなお解決できない問題も多く、課題を残している。比較検討は困難だが敢えて纏めるなら、見解は以下の通り集約されよう。まず、集団構造に関して言えば、各氏とも分散時と集住時の異なる居住形態を想定する点で一致する反面、近藤氏は危険分散論の、春成氏は共同防衛論の立場を採る点で大きく異なる。これより上位には春成氏は部族を、小野氏は部族の下位に氏族を想定するほど、把え方は様々で混迷の度は深い。更に、石材採集に関して言えば、見解は全く違い春成氏が部族間レベルの間接入手（交易の存在）を想定したのに対して、小野氏は直接入手を主張した。議論の中でも、各氏の概念が異なる点是指摘（中山 1976）を受けたわけだが、意見の一致は日常の生活単位を単位集団と考える点と、必要に応じ集住する集団の姿を想定するところまでであり、それより上位の概念は観念的色彩が強い。考古資料の限界を加味するなら、無理して概念を当て嵌めず今は地域分析を積み上げ集団の動態を見極めるべき時期とも思える。なぜなら、現在の認識にはいままで以上に広く集団の行動範囲を想定する考え方も示され、石材入手の問題、原産地と消費地の問題解決が不可欠であり、更に検討を要す課題でもあるから。

（2）砂川遺跡の研究

砂川遺跡最大の成果は、「石器の接合と同一母岩の認定を下に、遺跡の形成を動的に把え、遺跡の構造研究に道を開いた」点である。砂川遺跡の研究は報告書の刊行後も続き、遺跡構造に関する資料吟味は行き届いている。ここでは報告書刊行後の再検討や再分析を取り上げ、分析深化の跡を追う。

まず、最初に集落規模に関する分析（稲田 1977）を取り上げておきたい。論考提出の経緯は考古学研究会の議論、特に春成・小野両氏の見解を受けており、この時代の集落にも大規模集落が存在するのか、それとも本来的に小規模か、を検討する中で砂川遺跡を取り上げている。そこでは、同一母岩は各々の地点（A・F）で分布が完結すること、各々の地点に存在する搬入石器の量が異なること、各々の地点に1ヶ所の礫群が存在すること、各々の地点に分布する石材が異なること（A地点には砂岩が、F地点には珪岩が分布）の4点を指摘した上で、同一母岩の剝離

を時間的推移の中に位置づけ、F地点がA地点に先行すること、同一母岩の共有や同一母岩の量的な関係を総じてF地点からA地点に移る間に別の地点を経由している、と考えた。氏の分析は、民族事例の援用を全面に押し出す考え方や、資料の表面的・表層的に解釈を行うセトルメント的な分析を批判したものともいえよう。これより以後の研究は、必然的に具体的な資料操作を下に展開することとなり、その後の研究動向に大きく影響した。

同じ年、安蒜氏は製作上の癖から製作者の数が推定可能と考え（安蒜 1977）、地点分布の中に更に小さな単位を抽出した。A地点とF地点に共通する母岩を取り上げ、剥片の用い方や加工の在り方から、同一母岩でも場所が違えば剥片の用い方や調整加工も異なること、遺跡間の移動時と違い石核自体が場を移動すること、の2点を指摘した。同じ年、同じ資料を扱い全く異なる見解を見た訳だが、論考はA地点とF地点の同時存在を前提に展開しているとも思える。

(3) 遺跡分布からみた社会論・集団論

遺跡分布からみた分析は既に見た近藤氏の他、相模考古学研究会の分布調査（1971）や神奈川考古1（1976）で試みている。分析の割には議論が進展せず、単に分布からみただけでは限界を感じて終わるのは目に見えている。ここでは安蒜氏の考え方（安蒜 1985・1990）を取り上げて見たい。

氏は遺跡の増減を通時的に把え、岩宿II段階（氏は第IV期に区分）より以降に遺跡構造の画期を求めた（安蒜 1985）。分析は遺跡群の類型化を試み、移動の観点から遺跡分布が示す現象解釈や生活様相に言及している。主たる分析のテーマは遺跡群の形成要因で、ある時期、ある区域に突然遺跡の数が増える遺跡増加期を遺跡群形成の画期と考え、槍先形尖頭器や細石刃など従来の石器製作の改良や新しい石器製作の導入、原産地遺跡群の形成、交易の想定など、画期と考える充分な要素を上げている。遺跡分布を移動の観点から把えた背景には、石器の製作を母岩単位に見た場合には遺跡で完結せず遺跡を越えて連続する、砂川の分析成果を評価したためでもあり、この点に分析の根拠を求めた。以下に主な論点を記す。まず、分析は遺跡数の少ない時期（Ⅰ～Ⅲ）と多い時期（Ⅳ～Ⅵ）に分け、その上で後者の群集的な在り方を示す遺跡の、相互関係解釈を試みた。移動の観点から、Ⅰ期～Ⅲ期の遺跡分布は周回的移動に伴う経路的区域を、Ⅳ期～Ⅵ期の遺跡分布は移動周期の短い頻繁な移動生活を示す、と想定した。さらには、遺跡が群在する状態の解釈も試みており、基部加工のナイフと切出形ナイフの偏在性を根拠に遺跡分布を解釈した。即ち、ナイフの偏在性と同一時期の生活址の「重層化」を総合して、周期的移動（季節的移動）を想定したのである。論旨より判断して、集団領域を台地単位に求め、類型Ⅱの遺跡の増加・減少に集団の頻繁な離合集散を想定している。なお、上位組織（部族）の存在にはより慎重だが、石器製作専門集団（原産地遺跡群の形成）の存在に言及するなど、全体の文脈は上位組織の存在を肯定しているようにも思える。

更に氏は、上記論考の延長で集落の分析を試みている（安蒜 1990）。論考の前半では遺跡構造研究の概要を、後半部分で集落構造の変化を論じている。氏は、まず大形遺跡を同時存在が確実

な砂川規模の遺跡の複数からなる「定時大形遺跡」と、繰り返し選地した結果の所産「累積大形遺跡」に分けた。また一方では、遺跡が密集して分布する遺跡群の在り方にも注目され、ある時期、ある遺跡に、同一段階の集落が重複することから単なる「累積遺跡群」と区別し、「川辺のムラ」と呼び、「定時遺跡群」と規定した。以上を時間的変遷の上に位置づけ、氏の言う「環状のムラ」（定時大形遺跡）から「川辺のムラ」へ集落が移り変わる居住形態の変化を想定したのである。氏は居住形態の変化を齎した背景に、原材料の在地化⁽¹⁾を上げている。

二編の論考は同一線上に位置するものだが、微妙に差が生じている。特に、Ⅰ期～Ⅲ期の集団領域の捉え方には著しい修正が見られ、台地単位に集団領域を推定した先の論旨から関東全域に及ぶ行動領域を想定した。修正は「環状のムラ」の発見を受けたものだが、原材料の在地化だけでは説明は充分ではない。極めて的を得た集落変遷の提示と思える反面、遺跡群に関する評価も砂川⁽¹⁾の分析成果が主たる根拠ともいえよう。

(4) 石材からみた社会論・集団論

石材に関する研究では、既に70年代の前半から石材の産地同定研究の開始に伴う提言（小野 1973）や、石材と剝離技法の関係（石材決定論や無用論、反映論）を問う議論が展開していた。特に、先の提言の中には分析（Renfrew 1969）の紹介以外にも、原産地遺跡群と消費遺跡、或は、石材の推定搬入ルート上に位置する遺跡分析の必要性も併せて説いていた。石材に関する研究はデータの蓄積も進み、いま最も関心を集めている分野だが、考古学サイドの研究は意外に進展を見ない。即ち、各種石材の産地同定は黒曜石を除き、その産地同定が難しく、未だ基礎的データの蓄積段階ともいえ、関東地域の石材研究では田村氏や澤野氏の労作（田村ほか 1987）や加曾利博物館の研究（後藤ほか 1984）が目につく程度と考えていい位である。ここでは、石材の採集を労働的側面から捉えた小野氏の考え方（小野 1975）と、交易の存在を想定した稲田氏の考え方（稲田 1984）を取り上げておきたい。

小野氏は、交易を前提に考えた場合、1. 原産地集団と消費地（南関東）集団の直接交易、2. 中間に集団を介した交易、の二者を想定した。が、当時の生産構造を考えた場合には、交換する余剰は生じ得ないこと、死活問題にも発展する石材確保を完全に他集団に依存するようなことは想定できないこと、の二点を指摘した上で石材の直接採集を想定した。

稲田氏は、原石の移動と消費の軌跡の具体的追究が彼の時代の「経済生活と社会関係の根幹にメスを入れ得る方法」と述べ、野川流域の遺跡や鈴木遺跡の石材分析を通じ石材の入手過程、及び、集団関係を考察した。分析は、まず礫層や礫群の礫を含む在地石材と搬入石材（ここでは、黒曜石⁽³⁾を取り上げている）の比較を行い、黒曜石保有率の変化の示す背景を考え、更には全時期を通じ黒曜石保有率の高い鈴木遺跡に注目し、集団の生活や集団関係を論じた。論考は黒曜石の保有率と在地石材の対比を通じ展開している。比較も遺跡構造の検討が行き届いている砂川遺跡と同じⅢ層・Ⅳ層の時期が選ばれ、また、「文化層石器群」の示す黒曜石保有率の在り方も基準を変えて検討を試みており、その上で特異な存在でもある鈴木遺跡と対比したのである。氏の言に

従えば、集団は黒曜石の欠乏状態に瀕した反面、常に黒曜石を持ち得た実態を、石材の入手と消費に長期のサイクルを持つ黒曜石と在地石材の頻繁な採集・消費サイクルからなる循環過程と捉え、鈴木遺跡と野川流域集団の黒曜石保有率が示す差の抽出は、鈴木遺跡に大規模・恒常的な集落と特別な性格を与えるしかなく、従前の主張とは異なる例外的評価に導いたのである。なお、氏は最後に集団構造にも言及しており、河川流域に砂川規模の集団の領域を想定する、一方で、鈴木遺跡に部族の長的性格を与え、二重の社会組織を想定した。石材構成から社会を捉えた先駆的研究と言え、分析の視点は高く評価されよう。

(5) 砂川的分析の下に展開した社会論・集団論

これまで各氏が論じた仮説は殆ど全て砂川遺跡の分析成果の下に展開していた。砂川遺跡では詳細に遺跡形成に至る経過を復元しており、同様な方法を個別遺跡に適用し、遺跡復元を試みる例（鈴木 1980・1982）も二三ある。最近では、砂川遺跡の分析を更に進め、より明確に概念を示し、より具体的に資料を分析する研究（栗島 1986、1987 a・b）も見られ、成果を上げている。そこには稲田氏の分析法を受け継ぐ姿勢が読み取れ、砂川的分析の到達点を示したとも思える。ここでは、栗島氏の分析法を取り上げておきたい。

氏は、接合資料や母岩共有を重視する分析を積み上げ、個別遺跡の分析成果の基に地域の遺跡構造を論じている（栗島 1986）。母岩分析を通じ、氏は「個体共有の姿」に異なる在り方を見出した。一点は多聞寺前のIV上cブロック及びdブロックの分析からえた石核移動を伴うタイプであり、もう一点は砂川に見る完成した石器、或は、剥片の移動を示すタイプである。前者には「分散型」、後者には「譲渡型」の概念（栗島 1983）を与え、石器や素材の均等分配を図る上の行為（手段）と考えた。更に、石器の集中部分を住居に見る立場から石器の廃棄行為にも触れ、個体の共有関係の見られない場合を廃棄と考え、遺跡規模の大きい鈴木遺跡や栗原中丸遺跡にも同様な観点から頻繁な移動に基づく結果の所産と評価した。それでもなお、鈴木遺跡の規模は群を抜いており、このことから文化層の連続性や遺跡分布に分析を転じた。鈴木遺跡、及び、流域遺跡の文化層の在り方は遺跡の規模や増減現象が全て鈴木遺跡と呼応関係を示していることから、河川に沿う移動を想定したのである。即ち、砂川や多聞寺前からえた集団の移動形態（同一地点に時を余り経過せずして戻る）を解釈の前提に据え、源流部に位置する鈴木遺跡を移動の折り返し点と捉えたのである。なお、氏は以下の論考で分析の深化を試みている。

栗島（1987 a）は先に取り上げた論考の本編と述べている。本稿の特徴は更に砂川遺跡の分析を深め「世帯」の分裂と、河川単位の移動を発掘資料の分析から想定した点である。前者の世帯の分離・集合は民族調査では良く知られ、当該集落を説明する際にも「流動的」、或は「バンド」的な集団の記述が目につく。想定を想定に終えることなく解釈を試みる分析姿勢は高く評価されよう。河川単位の移動に関する分析・評価は、先の論考を補う意味で分析の深化を試みている、と言える。分析は集団の移動回帰を介在した結果の所産と見る砂川のA地点、及び、F地点の石材構成が何故に異なるのか、ということに答えるため、集団の移動を在地石材の石材構成の観点

から見直したものともしよう。砂川だけではなく多聞寺前でも移動を境に遺存する石材構成が大きく変わることから、石材入手の面から台地の北側や南側へ移動した結果の所産と考えた。更には、移動は消費石材の採集・補充だけではなく集団相互の接触や交流の契機とも推定し、経済的側面の他にも社会的側面を映し出したもの、と評した。

栗島(1987b)は、遺物論と遺構論の統合を試みたものだが、氏の考え方の特徴が良く分かる論考でもある。個別遺跡の分析よりえた成果から時代特性の全部を語り得ないということを承知した上で、なお「個人を知ることなくして集団は語り得ない」し、「集団を知ることなくして社会を論ずること」は不可能と述べ、「個人同志の関与性こそ社会性の表出」と主張した。

一連の論考は、安藤氏や稲田氏の考え方に通じるところがある。寧ろ両氏の見解を受けてより詳細に具体的資料を以て論証する姿勢が窺える。が、反面では分析が詳細に互り、理解を難しくしている面も否定できない。考え方の根幹には石器の集中部分＝住居と考える点であり、その背景には個体共有の在り方がある。即ち、ある種の単位を石器製作に見出し、特に石核の移動や石器の相互的・有機的な関係を見出したのち世帯を想定するのである。個体単位に見た世帯の変動は石器が動く砂川の場合は理に叶う解釈だが、逆に多聞寺前IV中の場合は少し難しいとも思える。なぜなら、例えば多聞寺前IV中のNo21の移動先を全て廃棄と考えていいのか、別々の地点に廃棄する適当な理由にはならないとも思えるからでもある。また、IV上(n・oブロック)、及び、IV中(f・j・kブロック)の接合関係を理由に集団移動・廃棄と見る想定も、ナイフに見る形式的認識(報文ではIV上に近い形式的特徴を有することから、IV中1と意識的に分けて記載している)は、微妙な故に短い周期の移動を傍証する材料とも言えるようだが、別々の地点に廃棄する理由にはならない。「なぜ何度も剥離の度に移動するのか説明したことにはならない」と見る批判(春成1976)に答えるのは難しい。頻繁な石核の移動を伴う剥離の評価は困難だが、IV上aブロックで試みた微細遺物の検出は、上記批判を解消する可能性を有するとも思える。

(6) 最近みる諸説

当該集落・集団の分析は、既に述べた通り砂川遺跡の分析を軸に展開してきた。石器組成から遺跡の性格を把握するセトルメント的な研究(小田・小林 1971)に疑問を投げ掛けたのも、遺跡の形成過程を詳細に検討していた砂川遺跡の分析を経験していたからでもある。以後、砂川を越える分析の提示は見られないまま現在に至る。逆に言えば、集落分析の基準が得られないため、遺跡の形成過程が判明している砂川遺跡の例に、基準を置く分析が展開してきたとも言えるのである。が、下触牛伏遺跡の環状構造を有す集落の発見は集落分析に一定の基準を与えた。現状に於いて、この環状構造を有す集落はIX層段階に特徴的であり(橋本 1989)、この種の集落を取り上げた分析(大工原 1990・1991)や集落変遷を追う分析(須藤 1990)も示され、一定の歴史的意義が付されつつある。二編とも母岩単位で見た個体の共有関係の分析を行う砂川的分析だが、最近では砂川的分析のみから社会構造を把握する方法には限界も指摘され(安斉 1990)、発想の転換を求める声が高まりつつある。田村氏の分析(1989)や角張氏の分析(1990)は、その具体的

実践の例である。

安斉氏は、我が国に於ける後期旧石器社会の再考を迫る中で春成氏の考え方を取り上げ、検討を加えている。そこでは大形動物の季節的狩猟（集団の離合集散）の是非が問われ、最近の研究成果からみて逆に中・小形動物の狩猟を主と考えるべき旨を指摘した。結果的に集住時の大遺跡と分散時の小遺跡と極端に見る考え方を否定した。氏は後期旧石器だけではなく中期旧石器まで遡り社会の特徴を述べ、「相互関係の乏しい段階」からより複雑な社会（X・IX層段階の環状構造を有す遺跡の出現）へ、更には石材の入手システム（VII・VI層段階、稲田見解とは多少意味の異なる婚姻同盟の成立と解釈している）の確立する社会へ、社会構造の変化を指摘した。そこではまた、遠隔地産石材の消長に社会組織の変化、画期を求めるべき立場を示したのである。

我が国の当該研究には正面から集団を問う研究が少ない。ある意味では氏が春成氏の考え方を取り上げたのも、最も検討に価する現代的意義を有しているからとも思える。縄文時代の社会を論じる氏の分析手法（春成 1982）には現生民族の調査成果を背景に資料を解釈する姿勢が著しく（この姿勢は評価の別れ目だが）、従来の縄文研究に比べ新鮮に感じた。春成論文を取り上げた理由も稲田論文と同じ姿勢を評価しているからかもしれない。要は仮説が仮説に終わることなく、視点を変え検証していく姿勢が議論の進展には欠かせないのである。

田村氏は、野見塚遺跡の先土器時代を纏める中で原産地と消費地の関係を通じ「石刃の生産と移動のメカニズム」を論じ、併せて集団領域の把握を試みた。集団の相互関係と適応戦略の成熟度をメルクマールに社会進化を見る構想が背景にはあり、日常消費する石材と搬入石材の在り方から集団の領域が想定可能と見る点では先に取り上げた稲田氏や安斉氏の考え方の具体的実践の例と言える。分析は二項的概念の下に行われ、原産地周辺部の遺跡（後田・善上・勝保沢中ノ山）と野見塚を比較している。特に石刃の在り方には注意が払われ、以下の点を指摘した。1. 原産地に近い後田遺跡では石刃を集中製作すること。2. 同一地域・同一段階の他の遺跡の石刃に比べ、後田遺跡の石刃はサイズが小さく、大形石刃を遺跡の外へ持ち出していること。3. 原産地周辺の遺跡や更に遠い遺跡では、原石の消費は一般的剥離の例に従い、石刃の限定的生産と河川移動に伴う周期的接近が想定されうること。全体に慎重だが、石材の直接採集を狩猟採集戦略に組み込む、水系単位の移動構造を想定している。

角張氏は、黒曜石の原産地、及び、消費地の石器群を通時的に把え、集団行動（移動）の抽出を試みた。分析は、主要器種の製作＝石材の関係把握に重点を置き、X・IX層段階を「地域循環型」、VII・VI層段階を「広域循環放射型」、V・IV層下部段階を「広域循環単位型」、それ以後を「地域循環単位型」とシステムの的に把えた。田村氏の二項的概念を援用した分析で、上記遺跡構造のシステムの把握は「いいえて妙なる表現」とも言える反面で、検討の余地を充分に残しているとも思える。段階1・2を例に採れば、「石刃を生産する固有の原産地をエリアの中に持ち、主に地域内で移動を繰り返す」と見る解釈には頷ける（例えば、赤城南麓では石器製作に適当な石材の産地は珪岩類を除いてない中で、黒色頁岩や武尊山北麓に多い黒色安山岩に依存する度合いが高

い)反面、中山新田の例は原産地に限らず石刃を製作していた事実を示しており、氏の想定とは大きく異なる。この想定は先に上げた田村氏がⅦ層段階に想定した見解に一致している。また、段階3・4の黒曜石原産地を含む、広大な範囲を同一集団の移動範囲と想定する考え方にも疑問が残る。本県に限れば黒曜石が50%を越える古城遺跡は異質だが、最近西毛地域では黒曜石が主を占める例も確認されつつあり、位置的關係から見ても北関東の地域性と一括してみるには難しい状況が生じていること、南麓では前代同様に黒曜石は客体的な存在であり、少なくとも広域とはいえない。氏の認識は一部事実と異なるようにも思える一方で、今後集団や地域を論じるうえでは重要な検討材料ともいえよう。

以上、長々と研究史を振り返り、集落研究の動向を整理してきたわけだが、研究史を簡単に纏めておきたい。

当該集落の研究は、研究初期の集団に関する理論的検討を経て、地域単位や河川単位の検討を行い、集団や社会を論じる研究が主流を占めてきた。小野氏の言を借りるなら、我が国の集落・集団研究は理論の外挿段階から、より具体的な検討へ推移してきたのである。遺跡の分布や石材からみた分析(稲田 1984、安蒜 1985・1990)や、砂川の資料を徹底的に追い世帯の分裂を指摘した分析(栗島 1987a)は具体的検討の成果と言える。集団や社会構造に関する分析も一様に集団や社会の変化・変質を予測し、通常の方法に従い時間的・空間的な推移の下に資料の分析を試みてきたのである。当然と言えば当然だが、現実には意識とは裏腹に砂川遺跡をモデルに例えてきた点是否定できないようにも思えるのであり、遺跡分布や石材の構成からみた推定に終始してきたようにも思えてならないのである。即ち、集落の示す多様な構造は個別遺跡の分析成果から抽出も可能だが、集団と集団の相互関係と言えば実態は殆ど不明と見てもいいのである。従来の研究を振り返れば、砂川の分析成果を踏まえ研究は徐々に進展していくようにも思えたわけだが、最近では別の視点から分析を行う必要も説かれ、当該社会の研究は次の段階へ展開されつつある。提言は多分に演繹的な色彩が強く仮説に従う分析が主流だが、分析の是非を問う前に研究初期の理論的研究から具体的研究に推移した研究動向と、視点を変えた分析が多大な進展を齎した事実を評価しておきたい。先の協会の席上でも同様な視点を念頭に入れた分析(梶原 1991)が示され、模索の第1歩を印している。これまで分析は技術的側面を重視してきた点是否定できない。今後は安齊氏の言う社会的な側面や精神的な側面を射程に入れた分析と同時に、集団関係の具体的記述を行う方法の模索が重視されよう。

3 砂川的分析の課題

本稿では、これまで当該集落や集団・社会構造に関する分析の動向を踏まえ、問題の所在を探り今後を予測してきたわけだが、併せて砂川的分析の検討も必要と考えている。なぜなら、別の観点から分析が行われつつあるいまこそ、砂川的分析の有効性と問題点を知る必要を感じるからでもある。これまでみてきてわかるように、砂川的分析には重要な成果が多い。搬入石器の抽出

や場の機能を考えるうえでも、また、石器群の同時性や石器の製作構造を考えるうえでも、砂川的分析の他には適当な分析が思い浮かばない。分析は「ここまで本当に言えるのか」と疑問に思えるほど詳細を極めている。例えば、石器製作のクセや世帯の分裂は重要な分析成果でもあり、その中でも世帯分裂の指摘には、その姿が鮮明に浮かぶようでもある。筆者も当該遺跡整理の際には砂川の例に習い、同様な観点から整理を試みてきた。なかでも勝保沢中ノ山・A地点⁽⁵⁾(岩崎1989)では原石や石核の入手・消費の面で極めて砂川遺跡に近い状態を抽出しており、ある意味では砂川的分析成果を追証した、と考えている。ここでは、実際の作業からえた感想の二三を述べ、砂川的分析に検討を加えていきたい。

砂川的分析は石器製作の実態を知る上でも有効な分析方法だが、遺跡構造を復原する場合には現状では最も有効な分析方法と言える。まず、分析は接合作業と母岩分類を基礎的作業に据え、搬入石器と遺跡製作石器を分け、原石や石核の補充・消費状態を考察していく。その後に各々の分析結果を総合して場の機能分析を行い遺跡構造の復原に至る。簡単に言えば、個々のデータを積み上げ、下から徐々に遺跡を復原するのであり、この点が最も良く分析の特徴を示している。言い換えるなら、母岩分類の成否が分析に大きく影響する分析とも言えるのである。特に、母岩の分類が難しい石材には分類の妥当性を高めるためにも、接合作業の占める割合は大きくなる。遺跡構造を解明するには砂川的分析が最も有効な分析方法と思える反面、母岩分類が難しい点を考え合わせれば、実際には非常に難しい要素を合わせ持つ分析とも思えてならないのである。現実には以下の問題を抱えている。

まず、分析は同一母岩の分類を前提に進行する。分析を円滑に進めるためにも、母岩の確実な分類を行う必要が生じるわけだが、実際には確実な母岩分類は極めて難しい現実には直面するのである。確実に分類するためにも接合作業を重視するわけだが、昨今の周辺事情の中ではそれにも限界を感じている。母岩の分類が難しいときには、極端に言えば分析者は砂川的な分析を諦めるしかないのである。また、分析は簡単に言えば母岩単位に発掘資料総体を分解していく性質を有しており、そのため最小の石器製作の単位を抽出する場合には有効性が高い反面で、集住を想定した場合や石器製作のサイクルを越えた継続的居住を想定した場合には集団相互の関係解釈には困難も予想され、この意味でも分析には限界を感じている。さらにはどお見ても動く必然性に乏しい剥片が移動している事実には直面する。完成した石器、石刃、石核など移動して当然の石器なら解釈も可能だが、極端な場合には小片が単独で離れて出土しているのである。取り上げ段階の混入と考えるには数が多過ぎるため、また、単なる廃棄とも思われないため、二次的移動の可能性を含め結論を保留する状態が続いている。このほかにも問題を内包している。集落全体が調査できなければ分析は難しいこと、或は、石器の集中部分の全掘が分析の前提にはあり、度々この前提を承知して上で分析していかねばならないのである。

分析は以上の問題と前提を抱え、そのうえ「分析に必要な情報は何か」の共通認識が形成されないまま分析を進めてきたため、分析に耐え得る資料の乏しい実態が現実にはある。とはいえ、

ただみていただだけでは事は進展していかないものであり、この点でも「必要な情報は何か」の共通認識を図る必要を感じている。砂川的分析を基礎的分析と評価するなら、遺跡の構造や性格を考える上で必要な情報は提供すべきであり、とりわけ、分析成果は誰でもわかりやすい掲載方法を模索すべきである。例えば、同一母岩に確実に分類が可能な資料だけでも分布状態を掲載すべきであり、また、母岩分類が困難なら石材単位で分布を示す必要も感じている。さらには母岩分類は無理でも、遺跡で製作した石器は何か、遺跡に搬入した石器は何か、程度は可能性を含め明示しておきたい。以上は次善の策かもしれない。が、情報が全く盛り込まれないより、事態は好転する。要は「何が必要か」の認識が資料の価値を大きく左右する、と自戒しておきたい。次に、大きな問題は砂川的分析方法で集団の集住や継続的居住が抽出可能か、に尽きる。言い換えるなら、検討の度に俎上に登場する「鈴木遺跡は果して大集落か、否か」の問題ともいえよう。この問題の解決は難しい。恐らく、今後も層位的出土の豊富な武蔵野台地や相模野台地の遺跡では証明は難しい、と思える。この問題を解決するためには分析の困難を乗り越え、母岩分析を行う作業が不可欠である。遺跡分布を語る場合に注意すべきことは、多分に人々は小河川や湧水点を選び、この部分に集落を構える傾向が強い点である。武蔵野台地の層位的出土も上流域に比べ開析の著しい下流域ではより少なくなる傾向を示しており、河川の上流では集落が重複する可能性を常に考えておかねばならない。母岩分類が難しい点は変わらないわけだが、寧ろ、集落の重複頻度が少ない地域の方が理解は容易と考えている。本県では、武井遺跡が大集落（拠点集落）の可能性を秘めている。武井遺跡には調査区内の全域から石器が出土しており、想定可能な遺跡の範囲は南北40m・東西20m程度の規模が予想され、この段階では質量とも群を抜いている。母岩に関する記載が見られないため即断は避けるべきだが、本県の当該遺跡の一般的な在り方から考えて、大集落（拠点集落）の存在を想定しておきたい。鈴木遺跡でも全部が全部、同時に存在したとは思われない反面、充分想定は可能と思える。

さて、砂川的分析は遺跡の形成過程を生きた資料から示し得る方法と言えるわけだが、一面では1つ遺跡の分析を以て移動前後の状況を暗示する分析（矢島 1977）ともいえよう。言換するなら、砂川的分析は縦の時間的推移を辿る分析ともいえるわけである。極端に言えば集団相互の関係、即ち、「横の関係」は検討が難しいのである。とはいえ、砂川的分析の中にも「譲渡型」や「分散型」の類型的把握も見られ、横の関係解明の視点が全く欠けていたわけではない。ただ、確実な母岩の分類が強調されすぎ、さらには母岩分類は分類したものしか分らないこと、そのため分析の共通認識に欠け、個別遺跡の分析で終わる事情が絡んで、それ故に一般に浸透せず波及が遅れたもの、と推察している。同様に、二極構造（佐藤 1988）や二項的概念も1つ遺跡が集団の持つ技術的属性の部分的表出と見る点では横の関係を念頭に入れた考え方だが、横の関係を直接説明するものではないようにも思える。反面、これまで社会や集団分析が砂川遺跡の分析成果を軸に展開してきた経緯、及び、先に述べた分析の限界や諸々の制約を見れば、二極構造の抽出や二項的概念の指摘は分析に一定の軸を与える、より明確な概念と見られよう。具体的分析が可能か、

どこまで有効か不明だが、今後は遺跡構造復原の分析にも積極的に先の二項的概念にヒントを得た分析記述を行う価値は充分ある。

最近、特に多い石材の分析も地域と地域の関係を解明するうえでは有効だが、上記概念を援用した分析(角張 1991)でも石材の直接入手を前提に分析しており、検討の余地を残している。更に、原産地と消費地の観点からみた分析にもより大形の石刃の搬出と見る見解(田村 1989)と、一方では産地から距離が離れるほど石器は小さくなる(梶原 1991)とも言われ、見解は一致を見ない。ともあれ、時間的・空間的分析の視点や、同種分析を行う際にも分析対象の遺跡の性格には充分留意すべきであり注意を要す。さらには、個別地域に立ち戻り地域の集団関係を解明するには、搬入石材の分析だけでは難しいということも当然予想されよう。なぜなら、もとよりそこには狩猟採集や石器製作の痕跡、ヒトの行き来、その他の生活全般の痕跡を残しているためでもあり、さらには集団相互の比較の中では集団が持つ固有の特徴(石材の構成など)が生きてくるわけだが、こと集団の中に入ればその特徴は集団の中に同化するため、特徴の抽出が難しくなるためでもある。例えばほかにも増して礫群が多い遺跡、ナイフや尖頭器の多出している遺跡などには注意すべきであり、周辺遺跡を含む人々を取り巻く複数の要素を総合分析する作業が欠かせない、と考えている。即ち、個別遺跡の分析成果でもある砂川遺跡を代表させ、全部が全部を砂川遺跡を残した程度の集団、或は、集落と見なす分析も説得的ではないのであり、今後は多様な集団・集落の変質・変遷を念頭に置いた分析が要請されよう。

以上、砂川的分析の有効性と限界性を考え、併せて地域分析・集団分析に関する若干の私見を述べてきた。そこには対象のレベルに応じ有効な分析が想定可能な一方、一面からみた分析の限界も同時に示唆していた。その意味でも砂川的分析は無視できないのである。

4 原産地遺跡群の検討と石材入手

最近の分析には、原産地遺跡群に関する分析や原産地と消費地に関する分析が多い。「原石の移動と消費の具体的奇跡の追究」が彼の時代の「経済生活と社会関係の根幹にメスを入れ得る」方法(稲田 1984)、或は、遠方の地より入手した「石材の消長に社会組織の変化・画期を求める」視点に立てば、より詳細に分析していかなければならない。原産地遺跡群の分析は既に「ふたがみ」の報告(松藤ほか 1974)の中でも語られ、遺跡の性格にも言及している。そこでは、原石が遺跡周辺で採集可能な遺跡と採集できない遺跡が存在すること、二上山に立地する遺跡と原産地からより離れた遺跡の石器組成の在り方(国府型ナイフと翼状剥片、使用痕の付く翼状剥片の割合)にもふれ、原産地遺跡群にも通常の遺跡と同様に、居住空間と見る見解を示した。一方、原産地遺跡群には完成状態にはほど遠い不良石器が多く、そのうえ、石器の集中製作も著しいことから、石器生産遺跡と見る考え方(安蒜 1991)も強い。岡村氏は原産地遺跡群を以下の通り捉えている(岡村 1990)。

- ① 原石の産地、及び、周辺に位置し、広い範囲に多数の遺跡が密集する。

- ② 原石は斜面や沢で採取する。質の悪い部分を淘汰した原石を採取する。
- ③ 遺物は明瞭に集中せず、一面に広がる。
- ④ 石器類の絶対量は万を越えるほど多い。
- ⑤ 二次加工を施す石器は1%前後に留まる。「試し割り」の痕跡を残す原石が多い。敲石は個人で所有し、石器製作遺跡より通常の生活を営む遺跡に持ち込む。楔形石器が多い。初期段階の石器製作に重点がおかれ、石核や剥片が多く、また石器は大きい。
- ⑥ 少量だが、他地域の石材製の石器・剥片を組成する。
- ⑦ 少なくとも縄文時代（草創期）まで特定の器種・段階の石器製作を示す遺跡は見られない。

更に、氏は原産地遺跡群と一般の遺跡を比べ、石器製作に差が見られないこと、他地域に産する石材から作出した石器が存在することから、短期逗留（日常生活を営む）して原石を採取し石器製作する生活形態を予想した。

一般的に、原産地遺跡群は遺物量も多く、また、遺跡の性格を反映して、石器の製作構造を知る良好な資料には恵まれない場合が圧倒的に多い。それにも増して母岩分類は難しく、遺跡構造の解明は困難を極めている。言い換えるなら、原産地遺跡群では石器の量的・質的把握が限界で、勢い、一部の属性を取り出す分析が主流を占め、そこから原産地と消費地の関係を推定する状態が続いているのである。石材の入手形態に関して言えば、直接入手と見る見解と間接入手（交易）と見る見解が全く対立しており、最近の論考を見ても百家争鳴の感を呈している。分析の進展を図る上でも原産地遺跡群のモデルを示す作業は不可欠であり、原産地遺跡群に関する性格解明は石材入手に関する議論にも有効な視点を供する、と期待されよう。以上が雑駁な原産地遺跡群に関する研究の現状だが、本県にも豊富な原石を背景に持つ地域が存在していることから、原産地遺跡群を形成する条件を備えた地域、或は原産地遺跡群が存在する可能性を秘めた地域ともいえ、以下に分析を進めていきたい。

ここでは、利根川と赤谷川の合流部に近い三峰山南麓に点在する遺跡群を取り上げていくわけだが、論を進める前に県内の石材研究の現状に触れておきたい。本県に於ける石器石材に関する研究は、飯島氏・中束氏の共同研究成果（飯島・中束 1983）⁽⁷⁾によるところ大である。石器石材の同定は同じ目で同定を受けており、ある意味では一定の基準を有している。未だ、資料蓄積の段階に留まるわけだが、類似石材の存在が県外にも知られるところとなり（田村・澤野 1988、小林・近藤 1991）、今後厳密な産地同定を行う必要が生じている。そのため三峰山の麓に広がる遺跡群にも県外の同種石材が存在する可能性を残している。が、遺跡の周辺で容易・豊富に原石が採集できるという遺跡の立地条件からみて、わざわざ多量の原石を搬入して石器を製作するとは到底想定できないため、ここでは従来の見解に従い、遺跡群に最も近い武尊山、及び、赤谷層に由来する原石と考え、論を進めていきたい。三峰山南麓の遺跡群に関する分析は既に述べた通り田村氏⁽⁸⁾が原産地と消費地の在り方を探る中で分析を試みている。ここでは氏の分析の跡を辿り、若干の検討を加えていきたい。

氏は、剥片剥離と資料の遺存状態を二項的概念の下に石刃技法を適用する石器製作を mode 1、その他の剥離を適用する石器製作を mode 2、ブロック外で生産する石器を process 1、ブロック内で消費する原石を process 2 と捉え、石器群が示す多様性の把握を試みた。その上で process の差が生じる背景を捉えるため、利根川上流域に所在する遺跡（後田・善上・勝保沢中ノ山遺跡）を対象に分析を試みたのである。氏は上記遺跡の分析の下に石刃の移動プロセスを記している。

即ち、石材の産地周辺で集中的に石刃を生産（後田遺跡）し、大形の石刃が集団と共に動いていること、石刃は集団の活動領域でもある集落（善上や勝保沢中ノ山の A 区）に持ち込まれ、そこでは一般的剥離に従う石器の製作を主に行う、と見た。分析を通じ、氏は集団の石器製作構造と遊動的移動を示したのであり、同時に、多分に広大な範囲を領域に持つ集団の石材の入手形態も想定したのである。分析は示唆に富み、分析の視点も頷ける部分も多い。氏の基本的な考え方には同感だが、疑問を感じる点も若干あるため、以下に述べていきたい。

まず第一には、氏は後田遺跡を「石刃を集中的に生産する特殊な機能を帯びた地点」と評したわけだが、この評価には疑問も残る。氏の分析に習い、後田遺跡の接合資料を表 1 に纏めてみた。表 1 にも示した通り後田遺跡では、原石から剥離を行う場合と分割してから行う場合の両者が見られ、両者とも剥離の前半で作業を終えている例が多い。また、基本的に地点間に互る接合は少なく、地点内で接合する場合が圧倒的に多い。さらには、基本的に地点間で接合する資料も同一地点で剥離が展開している（第 1 図）。母岩分類は難しいわけだが、特徴的な青味の強い珪質頁岩の分布も基本的に地点内に収まる。以上の傾向を踏まえれば、後田遺跡の性格は氏も言う通り極めて特殊な機能を帯びた遺跡＝石刃製作遺跡と評されよう。しかし、改めて注意すべきことは、後田遺跡でも石器の集中地点は極めて多様性に富む点である。分布には粗密が著しく、決して同じ内容を有しているわけではないのである。先に上げた数字も石器製作の色彩が濃い、接合資料を多く持つ地点（42号）を入れたものでもあり、この地点以外では出土量の多い地点でも出土量の少ない地点でも、mode 1・2 が共存する状態を示している。⁽⁹⁾ 石刃の集中的生産を行う地点の他にも一般的剥片の生産を行う地点が存在する可能性を残しており、さらには、接合関係を見られない接合資料やナイフが多く存在していることから、そこには日常生活の想定が可能ともいえよう。また、石材の豊富な地域にも一般の集落に何ら変わらない内容を示す遺跡（氏の分析に従えば、善上遺跡が該当する）が存在する事実は、石材の豊富な地域の遺跡にも石刃の集中剥離と共に、日常生活を営む可能性を示しているのであり、寧ろ、日常生活の中で必要に応じ石刃を生産するともいえよう。一律には遺跡を評価できないわけだが、日常生活の存在は氏の考え方を否定するのではなく、寧ろ、氏の想定する「石材獲得を狩猟・採集戦略に埋め込む」周期的移動を伴う集団の移動形態とも矛盾なく理解されよう。

氏は、より広い範囲の集団移動を想定したわけだが、問題は「集団の領域範囲」の実態と、石材の豊富な地域を集団が占有したのか、それとも共有したのか、という問題である。それでは、次に県内各地の様相を原石や広域石材の観点からみていきたい。ではまず最初に原石に関して言

表1 後田遺跡（北西側集中部）・剥片剥離の類型区分

ブロック	接合資料の数	点 数	接合番号	剥離の区分	表皮の有無	石核の有無	素材の形状	剥離の工程	石 材
29	6例21点	59	58	mode 1	あり	あり	分割礫	後半	黒安
29			59	mode 1	あり	あり	分割礫	後半	黒安
29			60	mode 2	あり	あり	剥片	—	黒安
29			61	mode 2	あり	あり	剥片	—	黒安
30	4例11点	49	62	mode 2	なし	なし	厚手剥	—	黒安
32・33			63	不明	あり	あり	原石	—	不明
32・33			64	mode 2	あり	あり	分割礫	—	黒安
32・33			65	mode 2	あり	あり	分割礫?	—	黒安
32・33			66	mode 1	あり	あり	原石	全工程	珪頁
32・33			67	1 (?)	あり	あり	原石	全工程	黒頁
32・33			68	mode 1	あり	あり	原石	全工程	黒頁
32・33			69	mode 1	あり	なし	分割礫	前半	黒頁岩
32・33			70	mode 2	なし	あり	分割礫	—	黒安
34			71	不明	あり	なし	不明	初期	黒安
37	8例20点	70	72	mode 2	なし	なし	不明	—	黒安
38	10例34点	133	73	mode 2	あり	あり	分割礫	—	黒安
38			74	mode 1	なし	あり	分割礫	後半	黒安
38			75	mode 1	あり	なし	不明	初期	黒安
38			76	mode 1	あり	あり	分割礫	剥なし	黒安
38	8例25点	149	77	mode 1	あり	なし	不明	初期	黒安
39			78	mode 1	あり	あり	分割礫	後半	黒安
39			79	mode 2	あり	あり	大型剥	—	黒安
39			80	mode 1	なし	なし	不明	不明	黒頁
39	41例207点	535	81	不明	なし	なし	剥片	—	黒安
42			82	mode 2	あり	あり	原石	—	黒安
42			83	mode 1	あり	なし	原石	前半	珪頁
42			84	mode 1	あり	なし	原石	初期	珪頁
42			85	mode 1	あり	なし	原石	初期	珪頁
42			86	mode 1	あり	なし	原石	初期	珪頁
42			87	mode 1	あり	なし	分割礫	後半	黒頁
42			88	mode 1	あり	あり	分割礫	前半	黒頁
42			89	mode 1	あり	あり	分割礫	後半	黒頁
42			90	mode 1	あり	なし	不明	初期	黒頁
42			91	mode 1	なし	なし	不明	不明	黒頁
42			92	mode 1	あり	なし	不明	前半	黒頁
42			93	mode 1	なし	なし	不明	不明	黒頁
42			94	mode 1	あり	なし	不明	前半	黒頁
42			95	mode 1	あり	なし	不明	不明	黒頁
42			96	mode 1	あり	なし	分割礫	前半	黒頁
42			97	mode 1	なし	なし	不明	不明	黒頁
42			98	mode 1	あり	なし	分割礫	前半	黒頁
42			99	1 + 2	なし	なし	分割礫?	前半	黒頁

えば、赤城西麓や南麓の資料（第2図）を比べて見れば一目瞭然だが、南麓の原石の方が小さな点は否めず、原石を二分し、更に二分（1/4）しており、距離関係に比例して原石の消費が分割と同時に進行しているようにも見えてくる。また、広域石材でもある東北系の珪質（硬質）頁岩の遺存状態も石器、或は、石刃の状態⁽¹⁰⁾で均質に存在しており（第4図）、そこには何ら差を認め得ない。以上の状態は、利根川上流域を核に周期的な移動を行う集団を想起する十分な要素だが、

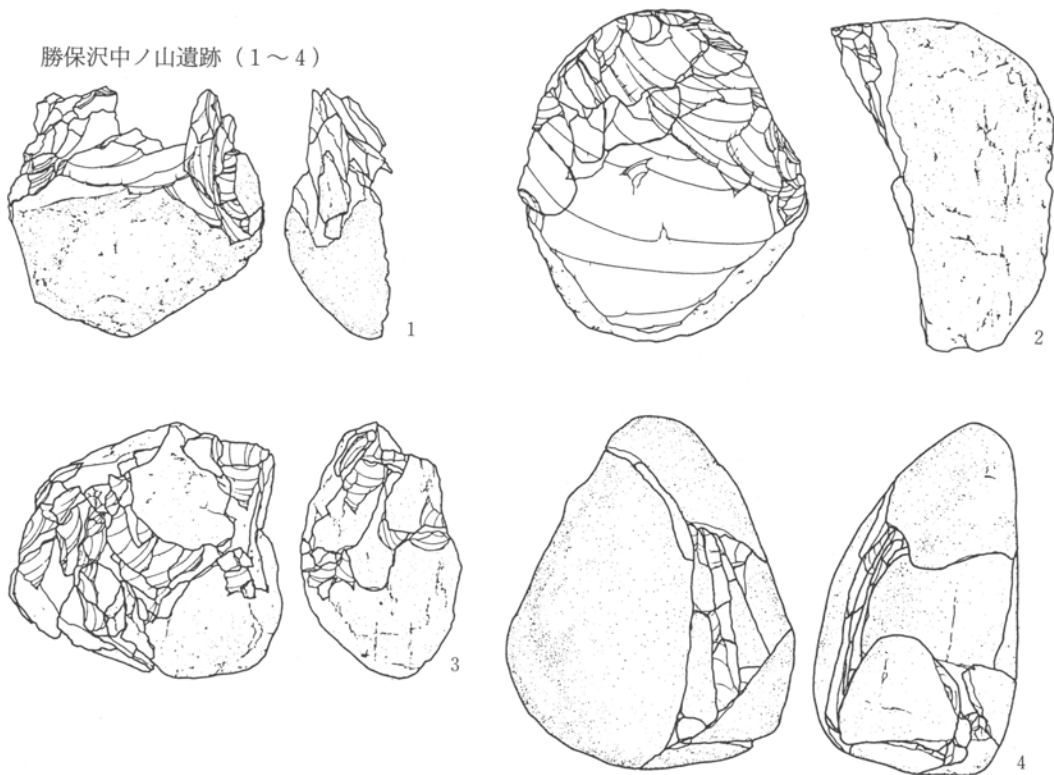


第1図 後田遺跡・接合資料の分布 (32号・33号)

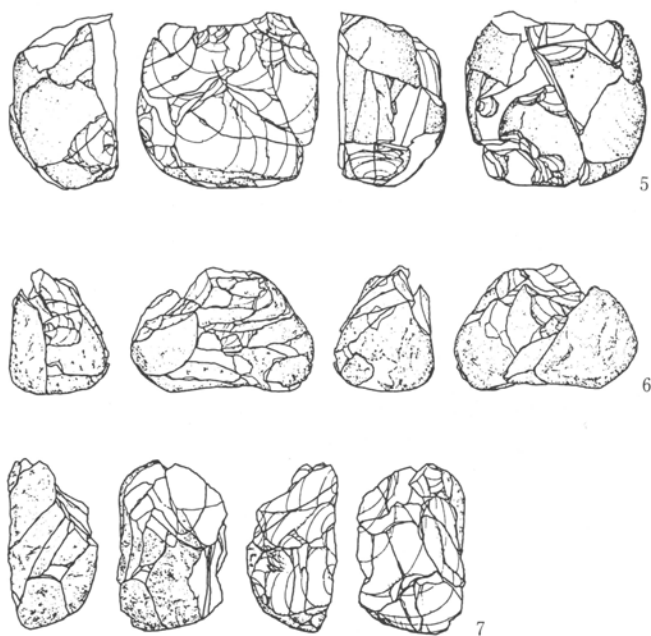
各地の様子を見極めてから判断していきたい。なぜなら、原石の豊富な地域の遺跡でも計画的に石核を消費する傾向が見られ、石刃の集中剥離というような一面的理解が妥当か検討を要すること、特に赤城西麓では後田と遜色ない原石から剥片を剥離していること、西麓や南麓の遺跡でも原石から直接剥離する例は少なく、分割状態の石核を単位に剥離が進行しており、原石から剥離を行う例が多い三峰一帯の現象は、原石の豊富な地域の特徴とも思えるためでもある。なるほど原石規模を見れば西麓と南麓では差が著しいわけだが、両者とも原石から剥離を行う可能性を残しており、現地で原石を採集していた可能性も全く否定できないのであり、仮に、野見塚遺跡の資料をブランクと見る評価が妥当なら氏の想定とは矛盾することにもなり、或は、中山新田の石刃製作が説明できなくなる。

以上は想像の域を出ないわけだが、A T降灰以後の遺跡分布と石材構成は、ある意味では石材の採集形態を暗示するものかもしれない。県内遺跡の石材構成はA Tの降灰前後で大きく異なる(第3図を参照)。広域石材も多く、広く石材を求める一方で、前代と同様に在地石材の使用も変わらない。この段階の資料には良好な接合資料に乏しいため断定は避けるべきだが、南麓の下触牛伏遺跡には剥離の初期を示す黒色頁岩(接合資料-33・報告書の第35図)や、黒色安山岩にも剥離の初期段階に生じる剥片から彫器を作出する例が見られ、直接原石から石器を製作している可能性も充分想定されよう。一方、この段階の遺跡は赤城西麓では見立溜井(16)に痕跡を残す程度で、以前の密な遺跡分布は見られなくなる。同様な傾向は原石の豊富な地域にも当て嵌まり、三峰山の麓には当該遺跡は見られない。原産地遺跡群の形成は通説に従えば、A T降灰より後であり、この地域にも当然存在していいはずだが、いまなお未確認である。以上の状態は、少なくと

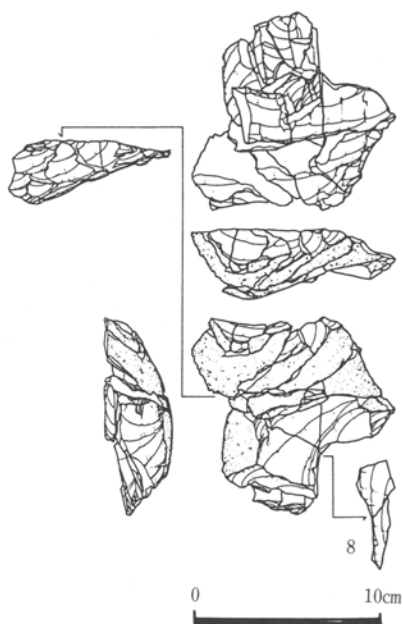
勝保沢中ノ山遺跡（1～4）



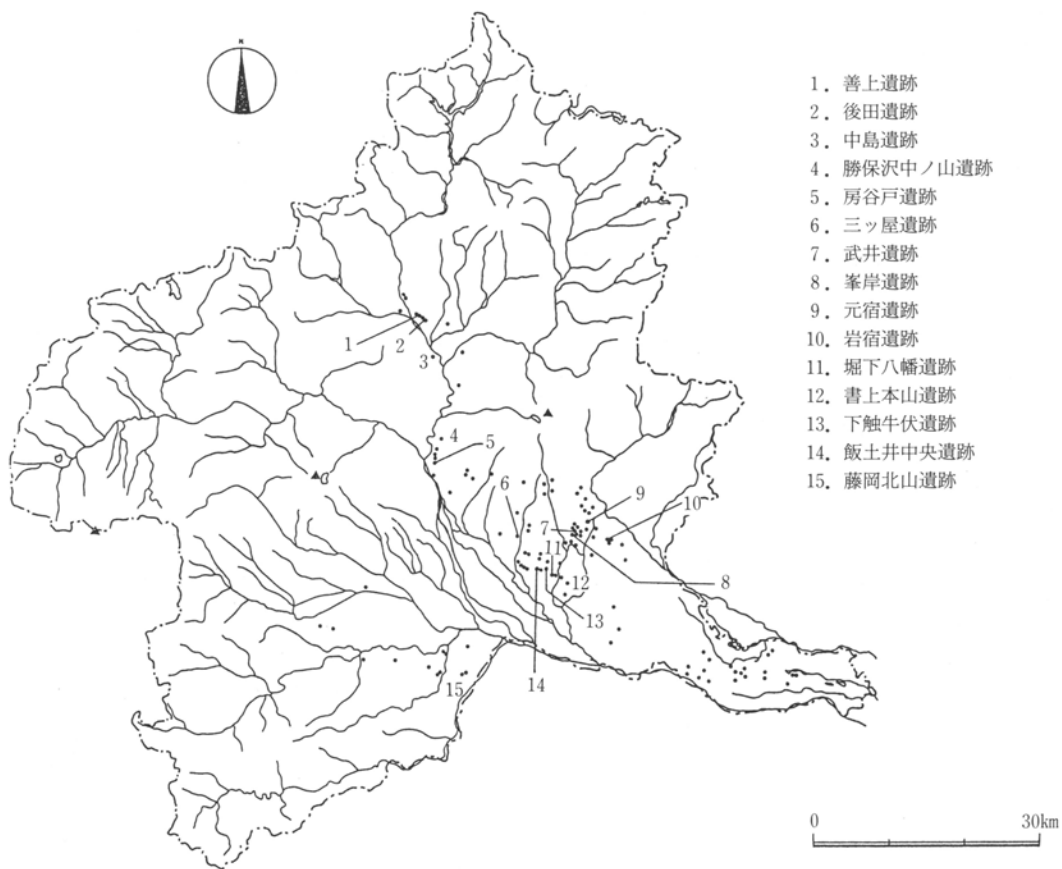
堀下八幡遺跡（5～7）



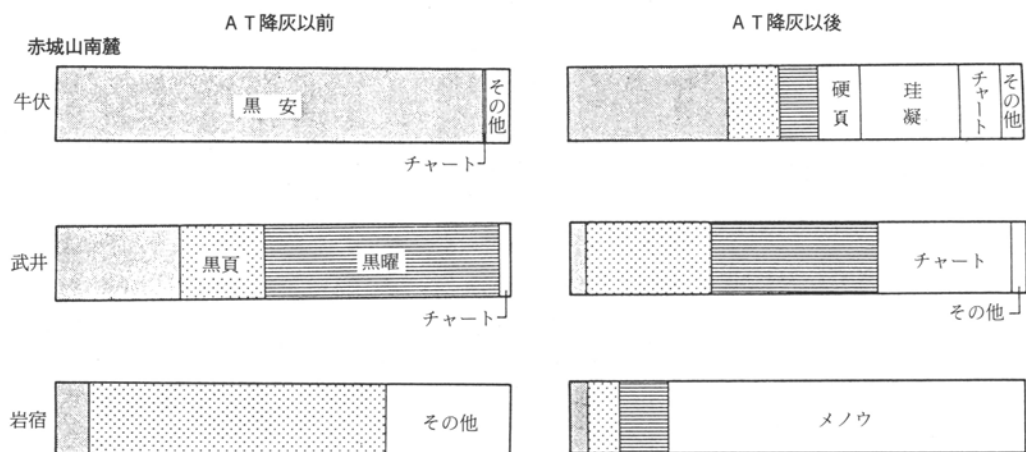
飯土井中央遺跡（8）



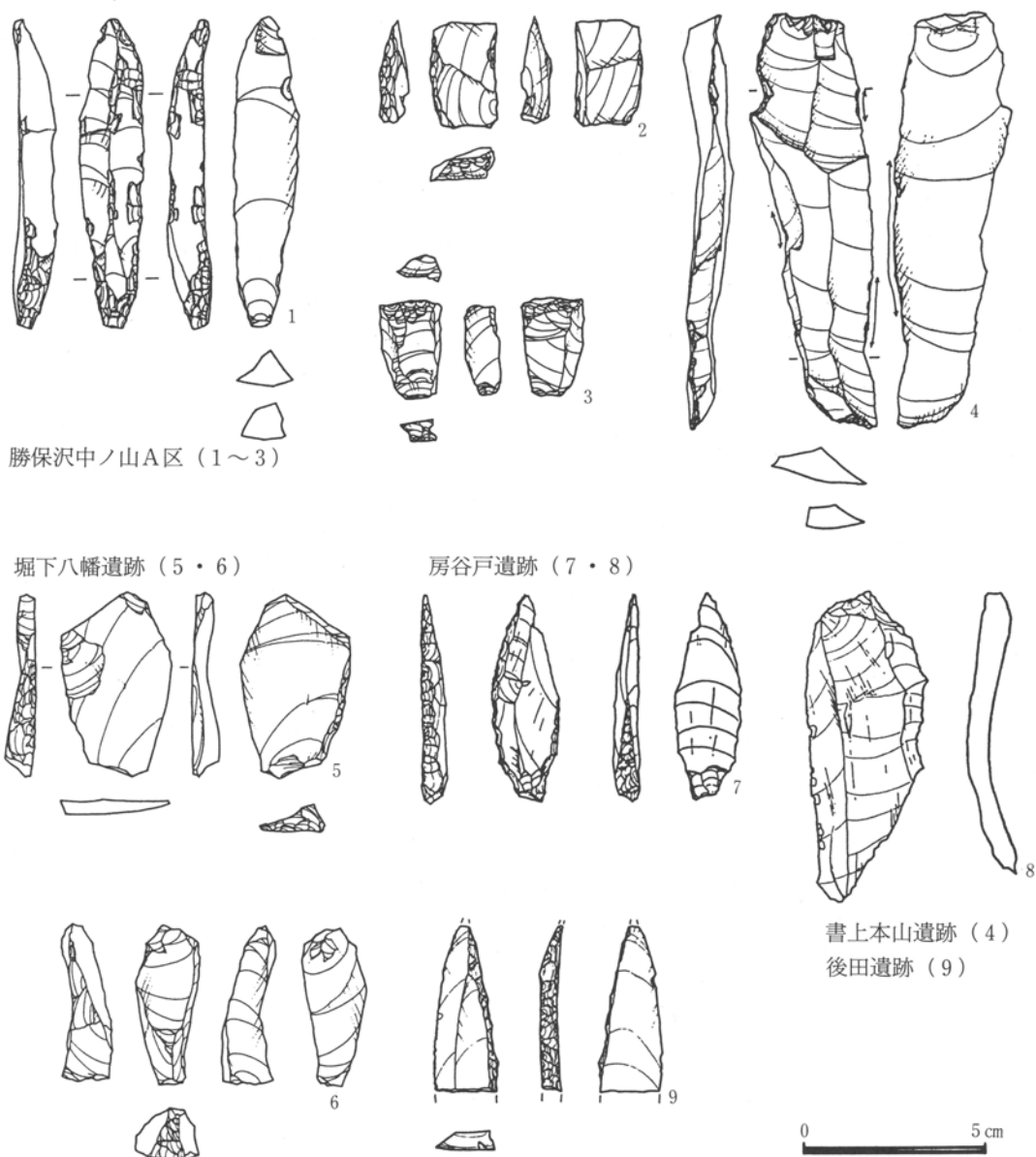
第2図 県内出土の接合資料



第3図 県内遺跡の分布



第4図 県内主要遺跡の石材構成



第5図 県内出土の東北系頁岩

も前代とは大きく異なり、⁽¹¹⁾ 周期的移動を伴う石材の採集形態が変化した可能性を示している。

なお、牛伏には黒曜石や東北系の珪質（硬質）頁岩も出土しているわけだが、この種の石材に関する入手は稲田氏や安斉氏が言う別の入手システムを想定すべきである。この種の石材の在り方は遺跡格差が著しく、例えば黒曜石の剥離が主体を占める遺跡、二次加工に比重を置く遺跡など多様な在り方を示している。また、東北系の珪質（硬質）頁岩に関して言えば、現状では剥片剥離以後の状況しか確認できないのであり、現状では県内遺跡には剥片剥離を行う遺跡が確認で

きないのである。今後、類例の増加が待たれるところであり、仮に同種石材の剥片剥離を主に行う遺跡が見られるならば、拠点集落の抽出にも期待が持たれよう。

取り上げた地域の遺跡が「原産地遺跡群」の範疇で捉えていいのか判断は別に、特に、原産地遺跡群の最大の特徴でもある「一面に広がる石器分布と、万を越える」ほど多量の石器は見られない。この点に関して言えば、岡村氏が述べた向山遺跡の立地条件、この地域で言えば後田遺跡より下の段丘上に石器の集中製作地点が存在する可能性も否定できないのであり、またこの地域以外にもより路頭に近い地点に原産地遺跡群の条件に合う遺跡が存在する可能性は全く否定できないのである。現状では、石器の製作に比重を置く遺跡の他にも日常生活の痕跡を示す遺跡も見られ、集団の周期的移動は想定できても、集団の「線型的」移動の想定は難しく、さらには石器製作のみ行う遺跡の性格まで規定できない状況を呈していた。田村氏の想定を裏付ける意味でも、今後の意識的な調査が望まれよう。

より広い範囲を集団が移動する見解は角張氏も指摘している。石材入手を直接入手と見る限り、より広い範囲の移動を想定するしかないわけだが、A T降灰以前の県内遺跡から出土する東北系頁岩が総て石器か、石刃であるということは、この段階にも「互酬的贈与・交換」の概念を当て嵌めていいようにも思える。多少なりとも黒曜石が入る状態も、先に述べた理由から充分想定が可能と思えてならない。黒曜石と東北系頁岩に剥離の有無が見い出せるなら、直接集団から得る場合と集団を仲介して得る場合などモノの移動形態と集団関係は密接に関係する、と考えておきたい。

これまで多少なりとも当該遺跡の調査・整理する機会に恵まれ、集落構造にも変質・変遷の過程を辿り得る感触を深めてきた。未だ想定の域を出ないものだが、環状構造を採る下触牛伏遺跡の分析結果から、必ず分散居住した集落が存在する可能性は高い、と思えた。実際、同じ構造を持つ集落にも規模の大小が見られ、上述の推定に確信を深めている。同時に、A T降灰以前に比べ、その以後の遺跡規模は著しく小規模となり、集団狩猟の際や遠方の石材入手や、集団維持の面で個別単位集団では自立できないため、理論的に考えて見てもA T降灰前後で集団構造は大きく変わる、と思えた。同様な観点で当該集落に言及した論考も提出され、また、現状ではA T降灰以後の段階にも集団の集住や、集団相互の関係を示す明確な痕跡の抽出は難しいため、本稿では集落・集団研究の現状認識を中心に、問題の所在と課題を整理してみた。

なお、本稿は1990年度「職員自主研究助成金」を得た「旧石器時代集落の動態」の成果の一部である。

註

- (1) 氏は、遺跡分布の分析から群集的な在り方を示すIV期より以後に居住形態の変化を想定した。更に居住形態の変化を齎した背景には石材採集形態の変化を予想し、「原材料の在地化」と表現した。婉曲な表現だが前後の文脈から考えて、ほぼ稲田氏の「石材入手システムの確立」に近い内容を示している、と捉えた。
- (2) 氏は黒曜石保有率が大きく変わるVI層段階に石材入手システムが確立する、と考えた。そこでは在地石材に関する分析も詳細に行われ、二三傾向を指摘している。論考中の図版類を見ても指摘の通り、VI層より前の段階では在地石材の使用頻度が高く、在地石材の中でもある種の選択が働いていた可能性は強い。また、指摘の通り、黒曜石を除く各種石材が礫層中に確実に存在するなら、安藤氏の言う「環状のムラ」出現の意義は薄らぐ。全部が全部、在地の石材とは思われない一方、氏の言う「環状のムラ」出現の意義は検討の余地を残している。
- (3) 論考には黒曜石の原産地に関する記述は少ない。当時の認識ではVI層段階を前後するところから箱根系の黒曜石から信州系の黒曜石に主体が移る、と考えていた。相模野台地では箱根系の黒曜石が多い傾向を示す一方で、信州系の黒曜石が多出する時期も見られるという(織笠 1991)。同じ黒曜石にもより至近の原産地から持ち込む場合と、遠く信州から持ち込む場合の両者が存在しており、今後は石器の製作状態と原産地の距離の関係からみた把握を要す。
- (4) 社会的側面を重視する考え方は稲田氏や安藤氏の論考の中にも見られよう。両氏の示した画期の差が何を暗示するのか不明だが、両氏とも石材に画期を求め、集団構造の変化を想定する点では一致している。
- (5) 勝保沢中ノ山・A区では東側の1カ所と西側の2カ所に石器が出土したわけだが、石器は主に西側の2カ所に集中分布していた。この遺跡では良好な状態で接合資料が得られ、また、同一母岩・22種を抽出した。そこには母岩の消費個体数量や搬入個数、石核の消費状態に一定の関係が見られ、このことから石器群を残した背景に「世帯」が想定可能と考えたのである。具体的資料から世帯を抽出するためには上述した状態の抽出が不可欠であり、以上の背景なくして世帯の想定は難しい。
- (6) 礫群の機能に関する意見は調理施設と見る点で、ほぼ一致している。が、礫群が集落の通常の施設か否か、この点に関する意見は一致を見ない。一般的に日常施設と見る考え方が主流だが、ここでは横の集団関係を模索するうえでも礫群の中には一部、保坂氏の言う「非日常」の礫群も想定しておきたい。
- (7) 先に述べた飯島・中東両氏の示した見解では、石材採集を原石の路頭付近に想定(例えば、黒色頁岩は赤谷本流の最上流部に、黒色安山岩は武尊山東麓に原石の路頭を想定している)しているようだが、実際現地を歩いてみたところ、遺跡周辺の段丘礫層にも多く混入しており、実際出土している原石のサイズから見ても、また、実際に打ち欠いて見ても十分に石器石材に耐え得る感触を得た。
- (8) 分析は群馬県内の遺跡を対象に石器群の線型的差異を抽出したわけだが、野見塚遺跡の原石採集地は鬼怒川上流域を想定している。更に氏は野見塚を残した集団が原産地に立ち入り自由な集団とも述べ、複数の集団が同じ原産地を共有する状態を示唆している。概ね、台地単位に設定が可能な石材構成の在り方と集団の「線型的」移動、100~200kmに及ぶ周期的移動が整合的に解釈が可能か不明だが、今後の重要な検討要素と思える。
- (9) 氏は後田遺跡の mode 2 は最初から横長剥片を意識した状態にはない、と考えた。即ち、mode 2 は基本的に mode 1 の中に収斂する、と述べている。氏の基準に従えば、同一打面から連続剥離する場合以外は、剥片の形状には関係なく、総て mode 2 に帰属する。剥離の二極構造はIX層段階の台形様石器群：石刃(ナイフ)の関係から抽出した概念だが、両者の関係はVII層段階に至り変質してくる。即ち、台形様石器群を支えた一般的剥離の一部がVII層段階に至り、縦長志向を強めており、そこから作出する剥片は見た目には石刃と判別は難しい。また、この段階には同一母岩から石刃と横長剥片を取る例(同母岩異石核、勝保沢中ノ山の接合資料A-2)や縦長剥片の剥離過程で作出した縦長剥片から小形剥片を取る例(同、A-4)、打面作出段階で生じた大形剥片から剥片を取る後田遺跡の例が知られ、さらにはそれまで場を違えていた縦長剥片の剥離と横長剥片の剥離を同一地点で行う傾向が見られ、剥離剥離の面から言えば、若干変質してきているようにも思える。
- (10) 勝保沢中ノ山には茶色を呈し、光沢の強い東北系頁岩を用いた石器が3点出土している。うち、2点(第★図2・3)は恐らく接合関係を有し、本来は幅の広い剥片と思える。なお、北山遺跡の例は青味が強く磯山の例に近い特徴をもつ石材感を呈する。
- (11) 赤城西麓の遺跡分布が少ない現象は、この地域がA s-B Pの主たる降下方向にも当たり、火山災害に伴う環境悪化と見る考え方も十分に成り立つ余地を残しているわけだが、南麓と後田周辺のA s-B Pの堆積状態には差が見られないため、現状では環境悪化に起因するものではないと考えている。石材の豊富な県北にも断片的に槍先形尖頭器の存在が知られ、また、槍先形尖頭器を在地の石材で製作するには県内の石材事情の中では黒色頁岩が最も適しており、槍先形尖頭器の盛行する時期は原産地遺跡群の形成時期にも当たる。以上を総合するなら、この地域にも同種遺跡の存在も容易に想定可能と言える。が、実際にはこの段階の周知の遺跡は少ない。仮に、この段階の同種遺跡が多く存在するなら、もう少し地元でも採集していいように思う。

引用文献

- 安斎正人 1990『無文字社会の考古学』六興出版
安藤政雄 1974「砂川遺跡についての一考察(1)」史館2号
1977「砂川遺跡についての一考察(2)」史館9号

- 1977「遺跡の中の遺物」『季刊どるめん』15号
- 1985「先土器時代における遺跡の群衆的な成り立ちと遺跡群の構造」『論集 日本原始』
- 1991「黒曜石原産地の遺跡群の性格」『鷹山遺跡群II』
- 飯島静雄 中束耕志 1983「群馬県における旧石器・縄文時代の石器石材」『群馬県立博物館年報』5号
- 稲田孝司 1968「尖頭器文化の出現と旧石器の石器製作の解体」15-3
- 1975「旧石器時代武蔵野台地における石器石材の選択と入手過程」『考古学研究』30-4
- 1986「縄文時代の形成」『岩波講座』6
- 岩崎泰一ほか 1989「ブロックの形成と遺跡の構造」『勝保沢中ノ山遺跡II』
- 岡村道雄 1990『日本旧石器時代史』雄山閣
- 小田静夫・小林達雄 1971「野川先土器時代の研究」『第四紀研究』10-4
- 小野 昭 1973「遺物の原産地推定をめぐって」『考古学と自然科学』第6号
- 1975「先土器時代石材運搬論ノート」『考古学研究』21-4
- 1976「後期旧石器時代の集団関係」『考古学研究』23-1
- 1984「旧石器時代の集落」『季刊考古学』第7号
- 1988「遺跡分布からみた旧石器時代の社会」『第四紀研究』26-3
- 織笠 昭 1991「先土器時代人の生活領域」『日本村落史講座6』
- 梶原 洋 1991「石器群形成に及ぼす石材環境の意義」『北からの視点』
- 角張淳一 1991「黒曜石原産地のダイナミズム」『先史考古学論集』第1号
- 栗島義昭 1983「個別別資料からみたブロックの在り方」『多聞寺前遺跡II』
- 1986「先土器時代遺跡の構造論的研究序説」『土曜考古』
- 1987a「先土器時代における移動と遺跡形成に関する考察」『古代文化』39
- 1987b「先土器時代遺跡の研究」『考古学研究』34-3
- 後藤和民・新井重三ほか 1984「縄文時代の石器、その石材交流に関する研究」『貝塚博物館研究資料』4
- 近藤義郎 1976「先土器時代の集団構成」『考古学研究』22-4
- 佐藤宏之 1989「後期旧石器時代前半期の研究」『考古学ジャーナル』309
- 鈴木忠司 1980『寺谷遺跡』平安博物館
- 1982『野沢遺跡』大沢町教育委員会
- 須藤隆司 1991「先土器時代集落の成り立ち」『信濃』43-4
- 田村 隆・澤野 弘 1987「先土器時代の石器石材の研究」『千葉県文化財センター研究紀要11』
- 田村 隆 1989「二項のモードの推移と巡回」『先史考古学研究』第2号
- 1990「野見塚遺跡の先土器時代」『野見塚遺跡』千葉県文化財センター調査報告174集
- 大工原豊 1990「A T下位の石器群の遺跡構造分析に関する一試論(1)」『旧石器考古学』41号
- 1990「A T下位の石器群の遺跡構造分析に関する一試論(2)」『旧石器考古学』42号
- 橋本勝雄 1989「A T降灰以前における特殊な遺物分析の様相」『考古学ジャーナル』309
- 春成秀爾 1976「先土器時代の画期について (一)」『考古学研究』22-4
- 1982「縄文社会論」『縄文時代の研究』8
- 保坂康夫 1987「礫群使用の非日常性について」『古代文化』第39号
- 松藤和人 1974「二上山北麓石器時代遺跡群分布調査報告」『ふたがみ』
- 矢島國雄 1977「先土器時代遺跡の構造と遺跡群についての序案」『考古学研究』23-4